JAELE Newsletter
上越英語教育学会通信
The Joetsu Association of English Language Education
December 23, 2016 No. 16

日本の小学校英語について　その１

上越英語教育学会　会長
上越教育大学教授　　北條礼子

みなさん、こんにちは。上越英語教育学会長の北條礼子です。定年まであと一年と少しになりましたが、学会長として、この学会のためにできることがあれば、最後まで精一杯務めますので、あと少しの間、宜しくお願い致します。今回は、日本の小学校英語の現状と将来について 2 回に分けて、お話し致します。

まず、小学校外国語活動（英語）の必修化後の実施状況ですが、外国語活動 (英語) は 2011 (平成 23) 年度から全国公立小学校の高学年 5・6 年生において必修化され、週 1 回年間 35 回実施されています。

また、2013年12月に文部科学省は、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画を発表し、さらにこの実施計画発表後に立ち上げられた「英語教育の在り方に関する有識者会議」は2014年9月に「今後の英語教育の改善・充実方策について　報告～グローバル化に対応した英語教育改革五つの提言～)」を発表しました。ここでは、現行5年生から行われている外国語活動を3年生からと、開始時期を早め、5年生からは教科としての「英語」を導入するという提案が行われています。

小学校での外国語活動の教科化は、中央審議会答申・新学習指導要領の発表時が決定の時であり、まだ実施されていません。新たな学習指導要領の内容や、教科化が決定した際の教科書がどのように選定されるのか、その動向が注目される状況です。文部科学省の直山氏は、2020年度の新学習指導要領全面実施（外国語教科化）という小学校英語の教科化までのスケジュールについて、2016年度には新学習指導要領、2017年度には教科書作成開始、2018年度には教科書検定、新学習指導要領を段階的に先行実施、2019年度には教科書選定、と示しています。

文部科学省は、グローバル化に対応した教育環境づくりを進めるため、小・中・高を通じた英語教育全体の抜本的充実を図ることとし、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を発表しました。その中では、小学校英語教育について、以下のように記されています。

中学年：外国語活動(活動型)週1～2コマ程度、学級担任を中心に指導し、コミュニケーション能力の素地を養う。
高学年：教科としての英語を週3コマ程度(モジュール授業も活用)、英語指導力を備えた学級担任に加えて専科教員の積極的な活用をし、児童の初歩的な英語運用能力を養う。

「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」発表後に立ち上げられた「英語教育の在り方に関する有識者会議」では、第9回の会議において同実施計画の実現に向けた具体的な内容について検討され、「～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～報告」がまとめられました。同報告における提言を踏まえながら、中教育審議会で「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」が検討されていくことになります。

英語教育の改善の背景として、「グローバル化の進展の中で国際共通語である英語力の向上は日本の将来にとって極めて重要」であり、「アジアのトップクラスの英語力を目指すべき」であるため、英語の「基礎的・基本的な知識・技能とそれらを活用して主体的に課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成」が重要であることと「コミュニケーション能力の育成について改善を加速化すべき課題も多い」ことの2点があげられています。これまでの実践を踏まえながら「学習指導要領では、小・中・高を通して１.各学校段階の学びを円滑に接続させる、２.『英語を使って何ができるようになるか』という観点から一貫した教育目標を示す」とされ、「各学校が4技能を通じて学習到達目標 (例：CAN-DO形式) を設定し、指導・評価方法を改善」することになりました。小学校高学年では、英語を教科化する場合には、先進的取組を検証し適切な評価方法を検討することや、外国語学習の初期段階であるため関心・意欲・態度・気づきなどを評価することも考えられています。

「今後の英語教育の改善・充実方策について　報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」では、小学校外国語教育について次のように述べられています。

中学年から「外国語活動」を開始し、音声に慣れ親しませながらコミュニケーション能力の素地を養う。
高学年では、身近なことについて基本的な表現によって「聞く」「話す」に加え、**積極的に「読む」「書く」の態度の育成を含めたコミュニケーション能力の基礎を養う**。そのため、学習に系統性を持たせるための教育として行うことが適当。

現行の学習指導要領では小学校での文字の扱いは「児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いること」とされており、積極的な文字の指導は積極的には推奨されてきませんでした。しかし、「高学年で『読むこと』『書くこと』も含めて系統的に指導する教科型の外国語教育を導入することで、児童の外国語の表現力・理解力が深まり、学習意欲の向上が認められている」という文部科学省 (2014) の見解も考慮に入れると、文字指導が本格化することが予想されます。また、小学校高学年では、現在、中学校で学ばれている内容を単に前倒しするのではなく、小学校の発達段階に応じて、積極的に英語を読もうとしたり書こうとしたりする態度の育成を含めた初歩的な英語の運用能力を養う指導が考えられると示され

ています。

小学校高学年で英語を教科化する場合は、「学習効果の高いICT活用も含め、必要な教材等を開発・検証・活用する」こととされ、「小学校高学年では英語の教科化に伴って教科書の整備が必要となる」とされています。英語が教科化され、教科書が整備されるまでの間は、補助教材や新たな教材が作成されると考えられます。研究開発学校や英語教育教科地域拠点事業の対象校・教育課程特例校等において2015年度から活用されおり、2年間の試行を通してその効果が検証されることになっています。

しかし、英語の教科化という新たな取組に不安を抱いている現場の小学校教員は少なくない状況です。特に、年配の教員の中には、退職までの数年間は教科化された英語を避けて通りたいという気持ちもあると思われます。日常業務に追われながら、「英語指導力を備えた学級担任」となるための取り組みとして、文部科学省は小学校英語教科化に向けた準備を進めています。事業として、2014年度より５年間で外部の専門機関と連携の上、英語教育推進リーダーを育成し、リーダーが所属する自治体の中核教員に研修を行い、次に中核教員が各学校へ校内研修をすることにより、研修成果の普及が図られています。小学校外国語活動が必修化になる以前、2年間で教員１人当たり30時間の校内研修が実施されることになっていましたが、小学校での英語教科化が決定すれば、同様の研修が行われることも予想されます。

大学院生活

大学院１年　言語系コース(英語)
上坂映梨菜

この大学院に入学して、もう 9 か月経ちました。この入学してからの 9 か月間、短い期間でしたが、すごく内容の濃い時間を過ごすことができました。

大学生の時は、教育専門の大学ではなかったので、あまり深く教育に関することを学んできませんでした。自分で本や論文から学ぼうとしても、理解に限界がありましたが、もう少し実践的教育全般・英語教育に関することを学びたいと思い、この大学院に入学しました。

この大学院に入ってからは、英語教育に関することを深く学んでいく中で、今まで知らなかったことが多く、毎日新しいことを学ぶことができています。自分の興味のある分野を集中的に学ぶことができ、すごく充実した毎日になっています。

ゼミは、院生によって研究している分野が違うので、自分の興味のある分野以外の分野を研究している院生が多いので、他の院生からいろいろな分野のことを深く学ぶことができます。

今は修論のため、自分の興味の分野である動機づけに関する論文を読んでいます。卒論を書くとき今までここまで論文で英語を読むことがありませんでした。最初は読むだけでもすごく大変でしたが、量を重ねていくうちに、徐々に読むのにも慣れていって、今は要点を上手くまとめ、批判的に読みながら内容を深く理解することを目標に頑張っています。

来年からは修論や教採に向けてさらに頑張っていかないといけません。修論は、さらに内容を深く読み、自分のしたい研究を絞れるようにやっていきたいと思います。悔いの無いように、残りの時間を大切に過ごしていきたいと思います。

今だからこそできること

大学院１年　言語系コース(英語)
柳岡　恵理子

早いもので大学院に入学して、もう７ヶ月が経った。授業は後期に入り、今では学生生活がすっかりしみ込んでいる。

ふと１年前の生活と比べてみると、今とは全く異なる時間の流れの中に身を置いていたのだと実感する。担任と部活動の主顧問を持ち、授業のコマ数は校内で最多の２１コマだった。平日は早朝に出勤し、日中には捻出できない時間を作り、事務仕事を行っていた。４クラスの授業を受け持ち、生徒の生活記録ノートにコメントし、単語テストの採点もこなさなくてはならず、空き時間は、あってないようなものだった。さらに放課後になると、会議や部活動、教材研究に追われた。土日は練習試合や大会への引率があり、月の休みが１日しかないことも珍しくなかった。そんな生活の中では、自分のために使える時間は皆無だった。家に帰ると、テレビを見たり、インターネットをしたりと、今から考えると時間を無駄にしていたが、その頃はそれが翌日の仕事に備える精一杯の息抜きだった。

しかし、今は全ての時間を自分のために使うことができる。平日はもちろん、土日も何かに縛られることはない。今は専ら学業中心の生活を送り、毎日図書館で閉館まで学習に勤しんでいる。以前の生活では必要不可欠だったテレビは、ほとんど見なくなった。

このような生活が送れるようになり、高校以来、英検に合格することができた。教員として学校にいれば、資格取得を考えていても、なかなかその勉強に十分な時間は割けない。物理的な時間の余裕もなかったが、それ以上に心のゆとりがなかった。今はまたとない好機を与えていただき、それを有効に活用することができている。

大学院の授業は学部時代よりも専門的で難しい。大学院に進学しなければ、知らないままだった専門用語や概念等、教わることはどれも真新しいことばかりである。私は教育学部出身ではないため、英語教育に関する知識はほとんど身に着いていないまま、教壇に立っていたが、理論に基づいた実践を行うことの重要性を知ることができた。また、これまでの経験から正しいと思い込んでいたことが必ずしもそうではない、と気付かされることもあった。自分の固定観念にとらわれず、謙虚に学ぶ姿勢を持ち続け、さらに多くのことを吸収していきたいと考えている。

来年の春休みには、「海外フィールドスタディ」という授業で、オーストラリアに１ヶ月滞在し、本学協定校のウェストミンスタースクールで研修を行うことになっている。そこでは、実際に授業を参観したり、TT で授業をサポートするだけでなく、T1 として日本文化に関する授業実践をすることになっている。これまで生徒として留学した経験はあるものの、今回、初めて教師という立場で海外研修に参加することになるが、今までとは違った角度で海外の学校を見られる絶好の機会であると捉えている。また、１ヶ月という長期間にわたって海外に滞在し、インターンシップのような形で学校に勤務しながらホームスティをする中で、自分の語学力をさらに磨けるよう努めたいと考えている（ただ、修論のことも気になるが…)。

これまで述べてきたどれ１つを取っても、学校現場では経験出来なかったことばかりである。内地留学を決め、生活を一変させる覚悟をしたことは、その頃の私とっては、かなり思い切った

決断だった。周りから心配もされたが、今はその決断が間違っていなかったと自信を持って言える。これから本格的な冬を迎えるが、群馬県とは異なり、冬はめったに晴れないという気象や初めての豪雪地帯での生活も、こちらでの２年間だけだと思えば、難なく乗り越えられる気さえしている。

今後の学校生活でも、このような素晴らしい機会をいただいたことへの感謝を忘れず、大学院で学んだことを現場に還元できるよう、さらに研鑽を積んでいきたい。

充実な大学院生活へ

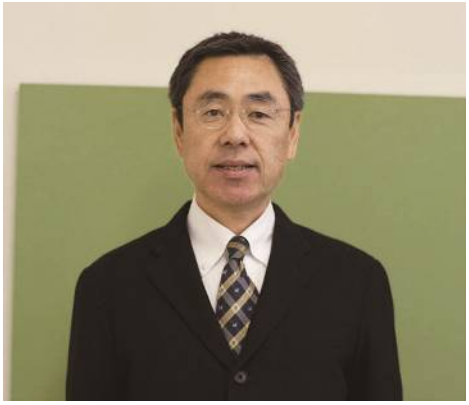
大学院１年　言語系コース(英語)
呂　維峰

最初、上越教育大学に勉強することは夢にも思わなかったが、その時、国に帰るか、日本に続いて留学するかというような戸惑いの岐路に立っていた。そのまま帰るとなんか物足りない、情けない気がする。せっかく親に背中を押されて留学しに来たのに、日本語も上手にならないし、何も身に付けていないとやはり気が済まない。そういう気持ちを抱いて、結局留学し続けることに踏み切った。しかし、問題も相次いで出てきた。例えば、どんな大学を選ぶか、どんな専攻を選ぶか、そしてその専攻が自分にふさわしいかどうかは全然見当がつかず、漠然な状態にあった。それに加えて、日本の各大学の応募締め切りも迫っていた。私はもっとイライラして、日本にいる友達に尋ねることに力を入れた。幸いなことに、紆余曲折を経て、ようやく目途が立った。上教大にいる友達から一通の朗報があって、英語コースに属する異文化コミュニケーションといった分野が留学生に対して結構人気があるとのことだった。かといって、英語コースに入るのはなかなか難しく、英語と日本語の力が必要なものだった。そこで私はすぐパソコンを起動させて、この分野の詳細を調べた。調べるほど嬉しい気持ちがこみ上げてきた。この分野は日本語と英語を両方とも勉強するのみならず、特に文化に関するコミュニケーションの能力も養うこともできる。留学生の私にとって本当に一石二鳥の効果があると思いながら大学院の修士課程に踏み込んでいる。そして、これから、Welcome to the Hell という感じで、より本腰を入れずにはすまない覚悟も決めた。しかし、困難があっても、ほどがあるだろうという態度ではあくまでもこの試練をしのげない。今まで前期の授業を振り返ると、いっぱい英語に関する専門用語が出てきて、眉を顰めながら考えを巡らすように勉強してから予習には準備不足と気づいた。では、準備に手を付けることをしよう、専門用語辞典を手放さずに調べたり、友達に聞いたりして、ようやく資料の内容には問題なしになり、少し胸を撫で下ろす思いがした。準備ができたことで自信満々で先生に教えられた内容を飲み込めるようになると思いきや、結局、理解できるかできないかのうやむやな状態にあって中途半端になった。さすが先生だけあって、言語を駆使する能力も人並み外れである。ものを説明する時に私たちによりよく把握させるために、いろんな工夫して、いろんな道を選んで述べている。そのうちに私はメモを取ったり、調べたり、日常生活に応用したりを通して少しずつ気品がある日本語も身に付け、本当に勉強になった。自分自身は怠らずに努力するのはさることながら、先生たちからの知識も自分のものにしていければ、さらに効果が上がると思う。以上は全部私の勉強生活についての経験ですが、勉強だけでは充実な生活とは言えず、

運動も大切だし、仲良くなるために友達を作るも疎かにならないように心掛けるべきだと思う。例えば毎日一時間ぐらいをかけて運動したり、友達とたまにパーティーを開いたりしてリフレッシュするのも生活の一部分ではないだろうか。

最後に、この場を借りて、私を励まし、助け、お世話になっている先生たちと院生たちに感謝いたしたいと思う。ひとえにみんなのおかげで私はここまで辿り着いた。長々ありがとうございました。

研究室の窓から



清泉女学院短期大学 教授
中村洋一（平成 4 年度修了生）

連載第 4 回

私を待つ人がいる

前の職場の隣にあった小学校は、もうかなり前から英語教育特区として小学校英語教育にとり組んでいて、そのアドバイザーをやらせていただいていたことがある。打ち合わせで、校長室を訪ねた時、壁に飾ってあった色紙に目がとまった。見覚えのある毛筆で、「私を待つ人がいる　高石ともや」と書いてあった。「私を待つ人がいる」というのは、1930 年代に、アメリカで人気のあったフォーク・ソングのグループ、カーター・ファミリーがレパートリーにしていた “There’s Someone A-Waiting For Me”（1930 年 5 月 24 日録音）という歌の日本語バージョンのタイトルで、高石ともやさんが詞をつけている。その原詞は、次のようなものである。

All the people of today, they are going far away
To the mountains, the lakes, or the sea
There’s a little spot out west that I always loved the best
And there’s someone a-waiting for me

She'll be happy (She'll be happy), She'll be free (She'll be free)
When she wanders alone with me, It'll be getting quite late
When I meet her at the gate, And there's someone a-waiting for me
Yodel-ay-ee, oh-ah-lee-oh-lay-ee
Ah-lee-oh-lay-ee, oh-ah-lay

There's birds in every tree and they sing among the breeze
But there's none so happy as me
I am going out west and there I'll do my best
To build a little home for you and me

Oh, the birds that fly above singing dear songs of love
O'er the meadows, the valleys so deep
Their voices so sweet that they sing me to sleep
For I know my darling will not weep

ともやさんは、この歌に日本語の歌詞をつけて「私の好きな谷間の村に、私を待つ人がいる」という世界を唄っている。

この色紙を見て、学校は「自分を待っていてくれる人がいる場所」であるべきなのではないか、と思った。

カーター･ファミリーの音楽に出会ってから数年後、ジャネット・カーターさんとジョー･カーターさんという、カーター・ファミリーの第二世代にあたる姉弟が来日し、京都でコンサートに出演したり、NHK で、永六輔さんがやっていた「テレビ・ファ･ソラシド」という番組に出演したりした。京都でのコンサートは LP レコードになり、彼らは、自分たちが住んでいるところを Maces Springs Virginia, near Bristol, on the border of Virginia and Tennessee と、かなりの南部なまりで説明していた。その情報だけを頼りに、彼らを訪ねていこうと考え、その翌年の寒中休業中に、アポイントメントなしで、アメリカに行った。カントリー・ミュージックの街ナッシュビルのバスディーポで行き方を確認して、インフォメーション・カウンターのおばさんに「カーター･ファミリーを訪ねるんです」といったら、Oh, it's nice! と言ってくれた。グレイハウンド･バスで、いろいろな街を過ぎて、とりあえず州境の街ブリストルに着いた。この街は Birth place of country music を謳っている。1927 年に歴史的なオーディションと録音のセッションが行われ、今ではカントリー･ミュージックのビッグバンが起こった町として売り出し、地域振興を行っている。ブリストルはナッシュビルよりも歴史のある、カントリー･ミュージックの聖地なのである。

小さなメインストリートのドラッグ･ストアでバージニア州の地図を買い、Maces Springs を探してみた。泊まっていた Bristol Motel からは、30 マイルぐらいの距離のようだった。明らかにインドの香りが強く漂うモーテルの事務室で、そこまでの行き方を尋ねてみたけれど、どうも、タクシーで行くしかないようだった。ブリストル 2 日目の朝、街に出て朝ご飯を食べ、タクシー

を拾って運転手さんに、Take me to Maces Springs, please. と伝えると、運転手さんは What? Where? I've never been there … . と言ったような気がした。というのも、運転手さんの英語は、5 日前に居たサンフランシスコの英語とはかなり違い、なんだか間延びしていて、聞き慣れないアクセントで、良く分からなかった。そこで、地図を見せて、「ここに連れてって」と何回も繰り返して、やっと車が動き出した。

地図を確認しながら、運転手さんも初めてだと言う山道を走り、目的地に向かった。車中、運転手さんが、いろいろ聞いてくる。"Where … ?" と聞いてくるが、良く聞き取れないので、とりあえず、"I'm from Japan."と答える。運転手さんは困ったような顔をして、また、"Where … ?" と聞く。"I want to go to Maces Springs." と答える。もっと困った顔をして、今度は"For what?" と聞いてきた。どうも、ずっと "Why do you want to visit there?"と聞いてくれていたようだった。Why が「ふぉぁ〜」と聞こえたのだった。とんちんかんなやり取りの後、"I want to visit the Carter Family, music Carter Family." と答えたらやっと、納得してくれた。

鹿に遭遇したりしながら、1 時間ほどで目的地の Maces Springs の中心、といっても、第一村人はまだ発見できないほどの小さな村の山の斜面に、Carter Fold と看板の出た大きなバーンのような建物を見つけて車を止めてもらった。そして車を降りる時、運転手さんが、"Is there anyone waiting for you?" と聞いてきた。そこまで、ただ無我夢中に、後先考えずにやってきてしまったのだけれど、よく考えれば、アポなしだし、今までの道筋にはホテルのようなものは皆無で、泊めてもらえそうなところはどこにもなさそうな小さな村だし、ジャネットさんが留守の可能性もあるし、居たとしても、自分を待っていてくれる保証はなく、追い返される可能性だってある。もじもじしていると、運転手さんが、紙とペンを出せというので、小さな手帳を渡すと、そこに、自分の名前と、電話番号を書いてくれて、"If there's no one waiting for you here, make a phone call to me. I'll come back and pick you up back to Bristol." と言ってくれた。今でもその時のメモを大切にしまっている。無鉄砲に山の中まで来てしまった日本人に（私のことです、念のため)、最大級の親切を見せてくれたのだった。

手を振って運転手さんを送り、斜面の中腹にある白い小さな家の前で、恐る恐る玄関のドアをノックすると、"How dee!" という底抜けに明るい声で、LP レコードのジャケットやテレビで観たジャネットさんが満面の笑顔でそこに立っていた。迎え入れてくれる人がいるのが、こんなにうれしいことだと初めて体験した。いろいろ話す間もなく、キッチンに連れて行ってもらい、お手製のハンバーガーをすすめてくれた。ちょうどお昼時になっていたのだった。食べ終わってコーヒーをいただき、やっと落ち着いたので、ここまでやってきたことの経過を話した。自分の名前を名乗っていなかったのに気づいたのは、その後だった。"You can stay here with us, as long as you want." と言ってくれて、結局 3 日ばかりお世話になった。それどころか、"Come back again, any time." のお誘い通り、その後、何回もそこを訪ねるようになり、ジャネットさんの息子の Dale と仲良くなって、ジャネットさんが亡くなってからも、もう 30 年以上もお付き合いが続いている。その村に日本人が来たのは、自分が 2 番目だった。最初に来たのは、高石ともやさんのマネージャーで、京都でのコンサートの出演交渉に来たとのことだった。そんな思い出話をしているところへ、L. A. に住んでいる日本人から、ジャネットさんの家に電話が入った。ジャネットさんは、なんだか、びっくりしたように応対し、最後には泣いていた。受話器を渡されて、日本語で話しを聞くと、そのマネージャーがホテル・ニュージャパンの火災で亡くなった、というニ

ュースだった。もう 30 年以上も前の事で、アメリカ南部の山の中の村では、なかなか細かい情報が入らず、続いて入ってきた、逆噴射で飛行機が墜落したというニュースを聞き、飛行機が墜落して、ホテルにぶつかり火事になって、マネージャーさんがなくなったのか、と混乱して、想像したりしていた。このマネージャーさんとは知り合いだったので、翌日からずうっとジャネットさんと、マネージャーだった Shirou さんのことを話した想い出がある。

帰国してから、Southern Hospitality という言葉を知った。Wikipedia には、Southern hospitality is a phrase used in American English to describe the stereotype of residents of the Southern United States as particularly warm, sweet, and welcoming to visitors to their homes, or to the South in general. と書いてあり、1835 年に Jacob Abbott という人物が Southern Hospitality は、the willingness of southerners to provide for strangers だと書いていることなんかも紹介されている。アーリー･アメリカンの歴史にあった助け合いの気持ちが生きていて、誰でも迎え入れるおもてなしの心が続いていることに感動した。

2016 年の 3 月、末の娘が小学校を卒業した。卒業式で PTA 会長として挨拶をすることになって、いろいろ考えた末に、「卒業生の皆さんは、中学校に行くと、英語の勉強を始めることと思います。今日は皆さんに "Boys and girls, be ambitious, curious and gracious!" という言葉を贈ります」と挨拶した。卒業式で、教育委員会代表の告示、校長先生の式辞と PTA 会長挨拶をした 3 人は、偶然にも、中学の時の同級生だった。女校長先生には「洋ちゃん (私のことです、念のため)、エイゴのセンセイみたいなこと言うわね」とからかわれた。

卒業式が終わり、ホームルームに入って担任の先生のお話を聞いた。人口減少の波に勝てず、30 人くらいの各学年単級の学校である。クラスのみんなが仲良く、支え合いながら頑張って来られたのは、担任をして下さった先生方のおかげでもあった。自分よりも若い担任の先生は、ひとりずつに話しかけてメッセージを下さった。笑顔の中にも涙があり、純粋に感動していた。「最後に、ふたつのことを言います。」と切り出した先生は「まず、皆さんは 4 月になれば中学生になるのだから、もうこの小学校に来てはいけません。」ときっぱりおっしゃった。えっ?と思った。そこにいた子ども達も、お父さんやお母さんも、みんな、えっ? と思ったようだった。泣き出す子ども達もいた。なんだぁ、そういう人だったのかぁ…、とも思った。すすり泣きが聞こえる中、「ふたつめのことを言います。」と先生は続け「でも、僕はみんなの先生だから、困ったことや、相談したいことがあったら、いつでも、僕に声をかけて下さい。僕は、ずうっと、みんなの味方です。ずうっと見守っています。」とおっしゃり、顔をくしゃくしゃにしていた。良い先生に担任していただいたなぁ、としみじみ思った。自分のことをずうっと見守っている、待っている人がいることを知ることは、その後の人生を生きる大きなエネルギーに繋がると思った。

"Karoshi" は、グローバル社会の中で、不名誉な市民権を得て、日本の notorious culture として認知されていると聞いた。学校の先生方も、長時間、ハードな仕事をしておられる。残業はもとより、朝早くからの「前業」をしなければ、仕事が片づかないとおっしゃる先生方もいる。PTA 会長としてお世話になった小学校の先生方も、朝早くから夜遅くまで仕事をしておられる。PTA の役員を一緒にやった、学校の近くに住んでいるお母さんに、朝 6 時前から夜 10 時頃まで職員室の電気がついている、と聞いた。ありがたい、と感謝する一方で、なんとか改善をしてい

かなければいけないのではないか、と強く思う。

我が国の政府は、少子化に伴い、公立学校の教員を減ずる方向性を提案している。次の世代を担う子ども達の教育は、どういう方向に変わっていくのだろうか?少なくとも、先生方が、どっしり、ゆったりと、「ここで待っているからね」と言える学校の環境を作ることが必要不可欠なことではないかと思う。

編集後記

巻頭記事に述べられているとおり、本学会の会長である北條礼子先生が退職まで残すところ約一年ということに、改めて時の流れの速さを感じています。二十代後半で上越に内地留学し、北條先生や多くの先生方にお世話になりました。私にとって上越はかけがえのない学問的故郷です。さて、本号でも３名の院生の皆さんが大学院生活での思いをつづってくださいました。特に、異郷で学んでおられる呂維峰さんの原稿は興味深く読ませていただきました。私は毎年、学会参加のために上越を訪れますが、妙高山や関川を見ると自分が初めて上越の土を踏んだ時の想いが甦り、胸がジーンとなります。呂さんも将来、私の気持ちを実感していただけるものと思います。こんな思いを共有していただける皆様、大学院修了後も、本学会へのご支援をよろしくお願いいたします。　　（編集委員 H.I.）

2016 年 12 月 23 日発行

発行者　上越英語教育学会

ニューズレター編集委員会

北條礼子（上越教育大学）

野地美幸（上越教育大学）

飯島博之（埼玉県立大学）